俺とＺな彼女たち

相馬十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とＺな彼女たち

【Ｎコード】
Ｎ３５００ＢＡ

【作者名】
相馬十

【あらすじ】
「隠れオタ」の高校一年生、吉良一途（きらいちず）は、同じ学校の教師である姉の命令で、新しいオタ系部活を作らなきゃいけない羽目に。
期限はわずかに一週間。その間に自分を除いて部員を３人集めなければならない。
部員探しで起こるドタバタな日常。次々と一途の前に現れる「残念」な「Ｚ」級の美少女。
そんな――隠れオタ系青春グラフィティ。

プロローグ　「吉良一途はできれば静かに暮らしたい」

ゼット【Ｚ／ｚ】

？英語のアルファベットの最終の字（※）。

？〈ｚ〉数学で、ｘ、ｙに次ぐ第三の未知数・変数・座標軸として使われる記号。

※アルファベットの最後であることから、これより上位のものは存在しない・最終・最高・究極、などの意味を込められる。

大辞林／ウィキペディアより引用

◆

「――吉良（きら）くん。起きてください！」

耳朶を叩く少女の高い声に、椅子に座ってうとうとしていた俺――吉良一途（きらいちず）は驚いて目を覚ました。

「……え？」

目の前には声をかけた超本人――川尻四十里（かわじりあいり）の端正な顔。彼女は机に手をついて、俺にキスしてくるんじゃないかって距離まで顔を近付けている。

川尻の大きな茶色（ブラウン）の瞳が俺を射抜く。小さなサクランボのような唇から目を離せない。

――な、なんだ？　ここはどこだ……？

記憶が混乱していた。俺は川尻の唇から必死の思いで目を引き剥がすと、寝とぼけてはっきりしない頭で周囲を見回した。

目に入ったのは、日当たりだけはやたらいい、段ボールだらけの室内の様子。

そしてすぐに気付く。ここは俺が通う高校の校内――俺が所属する『禅道（ぜんどう）研究会』の部室だということに。

……だんだん思い出してきた。たしか俺は部室に一番にやってきて、他の部員が来るのを待っていたはずだった。しかし春の午後の暖かな陽気に誘われて、ついうとうととうたた寝してしまっていたのだ。

「ね、ねえ……ききき吉良くん！　こ、こっち向いてくれませんか？」

続く川尻の声が俺を完全に覚醒させた。俺は言われるがままに視線を川尻に向ける。

「き、聞きたいことがあるんですけどっ！」

頬を紅潮させ、呼吸を荒くして俺に詰め寄る川尻。

……ちょっと、いや、かなり怖い。

「は、はい。なんでしょう？」

川尻の丁寧語の迫力に圧され、俺も思わず敬語で返答。

「ど、どうして岸辺(きしべ)さんのことを、フ、フレンドリーに、は、はは『二十日(はつか)』って名前で呼ぶようになってるんですか！？」

「……え？　ああ、それは――」

「――わたしが何か？」

そのとき――俺の言葉を遮って、凛とした声が割り込んだ。

声がしたのは部室の入り口。そこに、まさに「容姿端麗」な美人の姿があった。

切れ長の目を眩しそうに細め、柔らかい春風にふわっと煽られる長い黒髪を手で押さえている――その美人の名前は「岸辺二十日(きしべはつか)」。

俺、そして川尻と同じ、都立園崎(そのさき)高校の一年二組のクラスメイトで、同じく『禅道研究会』の女子部員である。

ハツカは俺と川尻の顔を交互に見比べると、ふんと鼻を鳴らした。

「……状況がよくわからないけど、落ち着いた方がいいわよ、川尻。いや……『尻肉』」

「わ、わざわざ言い直してまで『尻肉』言わないでください！　だからそれ『はがない』のパクリです！」

「ふ。ゆとりはすぐに似たようなものをパクリパクリと言う……。いいこと？　これはオマージュというものなのよ。そのへん混同しないでほしいわ」

「い、言い訳がましいことを！」

「模倣は文化の発展の第一歩。わたしは模倣を否定しないわ」
なんだかすごくどうでもいいことで言い争っていると思うのは気のせいではないだろう。
……仕方ない。ここは形だけとはいえ、この部の部長である俺が収めねばなるまい。
と、俺がノープランのまま何か言おうと口を開きかけたとき、川尻が目を剥いた。
「吉良くんっ！」
「は、はい！」
唐突に話を振られて、俺は思わず直立不動で返答。
「その、あ、ああああ……」
「あ？」
「あ、あたしのことも『アイリ』って呼んでください！」
「……はい？」
「き、岸辺さんを『ハツカ』と呼ぶなら、あ、あたしのことも名前で呼んでくれないと不公平じゃないですか！　そ、その代わり、あたしも吉良くんのこと、い、いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい……」

「い？」

「いちいちいちいち、いやいやいや……い、いち、ず……そ、そう！　『ずー』くんと呼びますから！」

……いや、呼ぶからって言われても。しかも、なんで集団で踊りだしそうなあだ名で？

「と、ととと、とにかく！　『アイリ』って呼ばなきゃダメです！　はい、復唱！」

「え、あ、はい。あ……『アイリ』？」

川尻の剣幕に押されて、俺は疑問混じりにそう言う。

途端。

「はい！」

と、アイリが輝くような笑顔で返答。

一方。

「……ちっ！」

ハツカは眉間にしわを寄せて舌打ち。

……なんだろう、この「ラノベのハーレム展開っぽい」状況は。

いや、勘違いするなよ俺。ここで勘違いしたらあとあと面倒なことになるぞ。

あくまで俺の目標は「静かに目立たず暮らす」ことだ。美少女が俺を取り合って意見をぶつけているなんて思い上がった妄想は捨て

るんだ。

そう。そんなことはあり得ない。

だって、始まりは――

第一章　「岸辺二十日は動かなくもない」　1

真正のオタクは大きく二タイプに分かれると思う。

「隠さず堂々」としているか、「隠してこそこそ」しているかだ。

前者は周囲の視線も気にせず己の道を邁進する超絶エリート。同好の士で集まってコミュニティーを築くなど、アグレッシブに行動して趣味生活を満喫する勇ましい人たち。

一方、後者は自分がオタクであることを隠して生活している人のことだ。隠れオタとも言い、中には周囲にバレたらすべて破滅すると思っている人もいる。

なお、晴れてこの春高校に入学した俺――吉良一途は間違いなく後者。

これまで「あくまで漫画やゲームが軽く好きな程度ですよ。アニメ？　ジブリとドラえもんとワンピースくらいは観たことあります」なスタンスでやり過ごしてきた。

だが実際は――昨夜も深夜二時台放映のラノベ原作アニメをリアルタイムで視聴し、今朝は六時に無理やり起床。某フランス皇帝以下の睡眠時間で満足できる身体ではないとわかっているのに、どうしても例の板の実況スレに入り浸るのをやめられない。そういう「間違いようのないほど間違っちゃった」オタクなのである。

そんな俺がなぜオタであることを隠すのか？　理由は簡単。

最近ではだいぶ市民権を得てきたオタクだが、世間的にはいまだ

に白眼視されていることは説明するまでもないだろう？
特に学校でオタバレでもしようものなら、その手の趣味に寛容でないクラスメイトたちから腫れものに触るように扱われることは必定だ。

だから――新しいクラスでの生活が始まったばかりのこの時期。小心者の俺は過去に心がけてきたとおり、オタクであることを隠しつつ、当面は目立たず騒がず。悪目立ちして出る杭にならないようにと心がけていた。

そうした生活も今日で四日目。

朝の通学時（ラッシュアワー）の満員電車に乗るのもこれで四回目となる。運良く空いた席に座れた俺は、車内に漂う温い空気を肺いっぱいに吸い込んだ。乗車してまだ五分しか経過していなかったが、慣れない満員電車に心身ともにすでにへとへとだった。
そのせいか、席についた途端すぐに睡魔に襲われた。電車の揺れに心地よくなり、うつらうつらしていると――

？まったく、小学生は最高だぜ！！？

車内に鳴り響いた「声」が俺の眠気を一気に吹き飛ばした。

……

……おい。

こりゃラノベ原作の女子小学生による熱血バスケアニメ、『ロウきゅーぶ！』の主人公のセリフじゃないかよ！　え？　何？　何で？

？まったく、小学生は最高だぜ！！？

――え、また！？

キョドる俺をあざ笑うかのように、続けざまに同じ「声」が満員の車内に響く。

その「声」は俺のいる場所のすぐ近くから聞こえていた。

それはどうやら携帯電話の着信音――着ボイスのようだった。

ざわめく車中。そりゃそうだ。セリフの意味を知らなければ小児愛好者（ちっちゃい子好き）みたいなことを言ってるように聞こえるんだから。

それにしてもよりにもよってなぜこのセリフなんだろう……？

と、気になった俺は周囲に視線を向けようとして、そこで目の前に立っている他校の男子高校生がニヤニヤ笑ってこっちを見ていることに気付いた。

なんだそのやけに嬉しそうな顔は？　もしかして俺のことを同類だと見抜いたのか？　そりゃたしかにセリフを聞いてキョドりはしたけど、そんなのいまのヤバげなセリフなら誰でもそうなるだろ？

いまの俺のどこにオタバレする要素が含まれてるんだっての。この、名前と声優似の地声以外はすべてに於いて目立たないという、まったく自慢にもならない容姿は伊達じゃない……って、あれ？

この「声」が聞こえてくる場所ってもしかして――

俺は上着の内ポケットに手を突っ込んでケータイを取り出した。

……あー。

俺のケータイが鳴り響きまくってました……。

「わぁい！」

思わずオトコの娘がどーたらこーたらとかいう「編集者いいぞもっとやれ！」な雑誌名の感嘆詞を口にしてしまう。

予想外過ぎた。いつもはバイブ設定だったからまさか自分のケータイが鳴っているとは思いもしなかった。

とにもかくにも。恥ずかしさで絶叫したくなる衝動を必死に抑え込んであわあわしながら電源を切る。それからすぐに車内の良識ある人々による「あの人ちょっと危なくない？　小学生がどうこうって……」的な視線を振り払うように、羞恥で熱くなった顔を伏せて寝たフリを決め込んだ。

心の中では大号泣。背中からは涙のように冷たい汗も流れている。

そのまま寝たフリをしつつ、薄目を開けて周囲を確認すると……ってくそう、もうあっちゃこっちゃからすげー目で見られてるじゃないかよう。俺と同じ学校の制服を着たマスクの女子なんか睨むようにじっとこちらを見てるし……。

やめてくれ。そんな目で俺を見ないでって。ちゃんと二次元と現実の区別はついてるから！　俺大丈夫だから！　いや、だからおい。目の前のお前。スタンド使いはスタンド使いと魅かれあうとか思ってんじゃねーだろうな。「俺も！　俺も！」みたいな顔でケータイ取り出してんじゃねーよ。いや、わかったから。そのストラップはたしかに『ロウきゅーぶ！』のゲームのショップ特典の「ブルマ型

携帯クリーナー」だってのは知ってっからチラチラチラチラ見せなくてもいいから。それ、俺も持ってるから！　ひな最高だから！

そして――

居た堪れない気持ちになった俺を乗せ、それでも電車は目的地へと向かう。

もちろん次の停車駅で一旦下車して、電車を一本遅らせました。

第一章　「岸辺二十日は動かなくもない」　2

隣の席は新学期が始まってから三日間、誰も座ることがなかった。

ちなみに俺の席は窓際列の前から四番目。右隣の席は女子の列だ。欠席している女子生徒は「岸辺二十日」という名前だった。「二十日」と書いて「ハツカ」と読むらしい。俺も人のことは言えないがかなり変な名前だと思う。

――もしかして、いわゆる「一度も登校しないでフェードアウト&ドロップアウト」という人なのかな？

……などとぼんやり疑り始めていた新学期四日目の朝。

朝の電車でのこと（「小学生は最高だぜ」着ボイス）もあって、内心びくびくしながら我が一年二組の教室に入った俺を待っていたのは――不気味なほどの静寂。

いまはホームルームが始まる前の待機時間だ。この時間、昨日までは当然のように騒がしかったものだが、今朝は誰ひとりとして席も立たず、話どころか声すら出していない。

何かあったのか？　と小首をひねりながらも俺はとりあえず自分の席に向かう。すると、そこでクラスメイトの静黙の理由を察した。

ものすごい美人が俺の隣の席に座っていた。

あまりの美しさに俺は息を飲む。

横顔だけでも「見ていて声を失う」ほどの怖いくらいの美人だった。肌は白く、目は二重できりっと涼やかで、うわっと思うくらいまつ毛が長い。鼻はすっと通っていて、唇は化粧も何もしてなさげなのにピンク色。いまどき珍しいくらいの長い黒髪はきらきらと輝いているように見える。

それは、化け物じみた凄絶な美。

――間違いない。この人だ。この人がいるから、教室は静まり返っている。

近所でも美人と評判だった姉がいるため、綺麗な人はだいぶ見慣れていると思っていた俺でさえ気後れする。だが、それでも彼女から目をそらすことができない。

その女子生徒――岸辺二十日さんは周りの静けさをまったく気にしていない様子で、大きな黒い瞳で睨むように文庫本を読んでいた。何を読んでいるんだろう？　と気になるも、書店のブックカバーが掛けられた文庫本ではわかるはずも――

……って、ちょっと待て。

目に入ったのは何の変哲もない茶色の紙のブックカバー。書店で本を買えば付けてもらえる類のものだ。

だが、俺はそのブックカバーを見て驚く。

――メロンブックス……？

俺が見間違うはずもない。あのブックカバーに印刷されているマ

ークはメロンブックスのロゴだ。

メロンブックスとはいわゆる同人誌やコミックスなどを専門に扱うオタク御用達の同人ショップである。我が地元「オタク受難の地」の静岡にもあり、実家にいたころはよく利用させてもらったものだ。

そのメロンブックスのブックカバーの付いた本を、漫画すら読みそうにないイメージのすごい美人が読んでいる……？

――え、どういうこと？

先述したとおり、メロンブックスで取り扱う商材は基本「オタク系」のものである。

そのカバーが付けられた本ということは間違いなくそっち系のもの。本のサイズは文庫であるから、考えられるのは漫画文庫かコズミック・ホラー（『クトゥルフ神話』）とかかラノベ。それか文庫サイズの同人誌。いや、でも待て。ブックカバーがメロンだからって、中身もメロンで買ったとは限らないだろう。家族か誰かのカバーをもらって普通の本に付けたとも考えられるし。そう、それなら家族の誰かから借りた本を読んでいるという線だって。となると読んでいる本はやっぱりラノベとかなのか、いやいやそれより何より、なんで――

「……なんでメロブ……？」

いろいろと考え込んでいるうちに、俺は無意識で心の中の疑問を口に出してしまった。ちなみにメロブとはメロンブックスの略称だ。

すると次の瞬間。

「……え！？」

と、透明感あふれる驚きの声を上げつつ、彼女――岸辺さんが一

瞬俺に顔を向けた。続いてあわてたように自分が持っている本を閉じ、そのままブックカバーに目を落とす。

「――はうっ！？」

それから岸辺さんはくしゃみした犬みたいに息を吐き出すと、顔色を朱に染めて俺のことをすごい勢いで睨みつけた。

「――！？」

その形相に思わず息を飲む。

眉間に深いクレバスのようなしわを刻み、形良い双眸を細くして、岸辺さんが無言で俺を凝視する。

凍る視線は絶対零度のブリザード。

「い、あ……」

彼女の視線に圧倒され声が詰まる。思うように言葉が出てこない。

まるで怜悧な刃物をのど元に突き付けられているかのような威圧感。冷たい汗が背筋を伝う。

……そうしてどのくらいの時間が経ったのだろう。あまりの緊張にどうにかなってしまいそうだと感じ始めたそのとき――ようやく始業を報せるチャイムが鳴った。

すると、まるでそれが合図だったように岸辺さんが俺から視線を外した。途端、俺にかかっていた圧力がすっと消える。

俺は見えない縛めから解放された気がして、ほうっと深く息をついた。

そして、気付けばいつの間にか担任教師も入室していて――何事も無かったかのようにホームルームが始まっていた。

呆然と見る窓の外の景色は抜けるような青空。

だというのに。俺の気分は晴れなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3500ba/

俺とＺな彼女たち

2012年1月9日01時46分発行